様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３８６

研究課題名（和文）日本語の不確定代名詞とその重複表現に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Japanese Indeterminate Pronoun and Its Reduplication

研究代表者
工藤　和也（Kudo, Kazuya）

龍谷大学・経済学部・准教授

研究者番号：３０７３６０９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、「誰々」や「何々」などの日本語の不確定代名詞重複表現について、現代語では主に単数解釈と複数解釈の2種類に分類されることを明かにし、歴史的に前者は後者からの語彙化によって成立したという仮説を提出した。さらに、単数解釈の不確定代名詞重複表現について、現代語ではある種の引用節内でのみ認可されるとする先行研究に対し、関西方言では、当該表現の分布が必ずしも引用節内にとどまらないことを指摘し、当該表現の認可には引用節という統語的な環境ではなく、慣習的推意（conventional implicature）の有無という意味的な要因が関わっていることを主張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、生成文法の枠組みに従って、日本語の不確定代名詞重複表現の意味的および統語的特徴を明らかにすることを試みた。本研究により、日本語の不確定代名詞重複表現が持つ意味的特徴を客観的に記述するだけでなく、人間言語において「重複」という操作が持つ普遍的機能の一部を解明することができた。さらに、当該表現の歴史的成立過程を明らかにすることにより、なぜこのような重複表現が様々な意味を持ちうるのかという形態論的に重要な課題に一つの理論的示唆を与えることに成功した。

研究成果の概要（英文）：This study argues that reduplicated indeterminate pronouns (RIP) in Japanese, such as dare-dare and nani-nani, are classified into two types in modern Japanese, singular and plural, and proposes the hypothesis that the former was historically established through lexicalization from the latter. In addition, it is pointed out that the distribution of singular type pf RIPs in Kansai dialect is not necessarily limited to quoted clauses, in contrast to previous studies, and proposed that one of the licensing conditions of such expressions is not based on the syntactic environment of the quotation clause, but on the semantic factors such as the presence or absence of conventional implicature within the clause.

研究分野：言語学

キーワード：不確定代名詞　重複　語彙化　閉鎖引用　慣習的推意

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

「何」や「誰」などの日本語の不確定代名詞（indeterminate pronoun）については、これが単なる疑問詞ではなく、他の要素との組み合わせによって様々な意味を表出する一種の拘束形態素であるという認識が生成文法の初期から存在していた。しかし、不確定代名詞を伴う語形成の具体的なプロセスについては解明されていない点も多く、不確定代名詞が重複した場合の意味の変化や統語的な分布に関する研究はほとんど行われていなかった。

また、重複現象（reduplication）については、これまで主にその意味的な機能に関して研究が行われてきたが、先行研究における重複操作の意味的な分析では、本研究の対象である不確定代名詞の重複表現には十分な説明を与えられない状況であった。

以上のように、不確定代名詞重複表現の意味が、不確定代名詞の本来的意味と語の重複という形態操作からどのように表出しうるかを解明することは、研究開始当初において言語学的に重要なテーマであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、生成文法の理論的枠組みに従って、日本語の不確定代名詞重複表現（例：「何々」、「誰々」）の意味的および統語的特徴を明らかにすることである。これらの特徴を明らかにすることによって、不確定代名詞が持つ意味を客観的に記述すること、また、人間言語における「重複」という操作が持つ普遍的機能を解明することを試みた。また、当該表現の語形成が形態部門で行われるのか、統語部門で行われるのかという学問上の論争について、一つの理論的示唆を与えることを目標とした。

本研究の学問的意義は、不確定代名詞重複表現の性質の解明が、現代言語学における大きな論争の一つである「形態論はどこにあるのか」（Where is Morphology?）という問いに、一つの理論的示唆を与えられると考えられた点である。すなわち、単に不確定代名詞重複表現の意味的および統語的特徴を明らかにするだけでなく、当該表現が人間言語の文法モデルにおけるどの段階で形成されるかを検討することによって、形態論が統語論とは独立したモジュールを形成しているという「モジュール形態論」（影山 1993）の考え方が支持されるのか、あるいは語形成が統語部門において統語的操作を拠り所にして行われるという「分散形態論」（Halle and Marantz 1993）の考え方が支持されるのか、あるいはそのどちらでもないのか、ということについて、一つの回答が得られると期待された。そのためには、当該表現の生産性や意味の透明性などを具に観察し、網羅的に記述・分析することが不可欠である。しかしながら、管見の限り、そのような視座に立った重複表現の研究はこれまでのところ行われていなかった。したがって、本研究の結論は、当該分野における一つの重要な知見として、その後の理論の発展に寄与するものである。

さらに、当該表現が語彙部門で形成されるのか、統語部門で形成されるのかという問題は、生成文法研究において現在進行しているミニマリスト・プログラムに対しても重要な示唆を与えうる。特に、すでに研究代表者が英語の *time after time* という構文に対して行った重複表現の研究（Kudo 2013）では、1つ目の time は2つ目の time のコピーであるという純粋に統語的な派生が提案されており、このことによって、統語部門における移動操作の凍結効果（freezing effect）について一つの経験的証拠をもたらした。今回の不確定代名詞の重複表現に関しても、これが統語部門で派生されるという可能性は十分に残されており、その場合は生成文法における統語部門の在り方について、何らかの理論的示唆が得られるものと期待される。

３．研究の方法

本研究では、主に語彙意味論の分析方法を踏襲し、不確定代名詞重複表現が持つ意味を明らかにするとともに、当該表現の成立過程（語形成）を理論的に考察することを試みた。さらに、当該表現の統語的な分布については、形式意味論の手法を用いて、当該表現が文内の他の語彙との意味的な共起関係によって認可されるという可能性を指摘した。

具体的には、本研究では、まず「何」や「誰」などの不確定代名詞が関わる語彙の意味を、いくつかの語彙意味表示を用いて記述し、そこから不確定代名詞重複表現が持つ語彙的な意味を抽出した。また、日本語の古典文学作品のコーパスから当該表現の用例を収集し、これらの表現が歴史的にどのような用法を持っていたかを観察した上で、当該表現の現代語にける分布を説明するため、形式意味論で近年注目されている慣習的推意（conventional implicature）の議論を応用し、その用例について理論的に分析した。さらに、同様の重複表現が見られる他の言語を観察し、「重複」という形態操作が通言語的に持つ機能についても考察した。

４．研究成果

本研究課題については、以下の成果を得た。まず、不確定代名詞重複表現について、先行研究の調査を行い、当該表現の分布や意味・用法に関する一般的考察を行った（工藤 2019）。続いて、当該表現を単数解釈のものと複数解釈のものの 2 種類に大別し、それぞれが現代語において異なる分布を示すことを明かにした。また、その成立過程を説明するため、日本語の古典文学作品

のコーパスから用例を抽出し、その成果をもとに、単数解釈の不確定代名詞重複表現は複数解釈のものから語彙化して成立したという新たな仮説を提案した（工藤 2020）。さらに、単数解釈の不確定代名詞重複表現について、現代語ではある種の引用節内（閉鎖引用）でのみ認可されるとする先行研究（Sudo 2008）に対し、関西方言では、当該表現の分布が必ずしも引用節内にとどまらないことを指摘し、当該表現の認可には引用節という統語的な環境ではなく、慣習的推意（conventional implicature）の有無という意味的な要因が関わっている可能性を追究した（Kudo 2021）。最後に、自然言語における重複操作が音韻、形態、統語、意味の各領域において、それぞれどのような機能を果たしているかについて、日本語を中心に現象を整理し、他言語との比較も含めて記述した（工藤 2022）。

なお、本研究課題は上記で当初の目的を概ね達成し、その研究期間を終えたが、本研究課題から発展した新たな研究テーマとして、「若々しい」などの重複形容詞の形態統語的特徴について分散形態論の観点から考察した論文が刊行される予定である（Kudo and Shimamura, to appear）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Kazuya Kudo and Koji Shimamura	４．巻 58
２．論文標題 On the adjectivalizer -si in the reduplicated and deverbal adjectives in Japanese	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Chicago Linguistic Society	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤和也	４．巻 43
２．論文標題 言語における重複操作について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 龍谷紀要	６．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kazuya Kudo	４．巻 28
２．論文標題 Quantification into CIs: Reduplicated Indeterminate Pronouns in Japanese	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 28	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤和也	４．巻 2
２．論文標題 日本語不確定代名詞重複表現の語彙化について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 KLS Selected Papers	６．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 工藤和也	4．巻 159
2．論文標題 日本語不確定代名詞重複表現の分布について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本言語学会予稿集	6．最初と最後の頁 332-338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 工藤和也	4．巻 40
2．論文標題 日本語の不確定代名詞重複表現について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 龍谷紀要	6．最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Kazuya Kudo and Koji Shimamura
2．発表標題 On the adjectivalizer -si in the reduplicated and deverbal adjectives in Japanese
3．学会等名 Chicago Linguistics Society 58（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Kazuya Kudo
2．発表標題 Quantification into CIs: Reduplicated Indeterminate Pronouns in Japanese
3．学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 工藤和也
２．発表標題 日本語不確定代名詞重複表現の分布について
３．学会等名 日本言語学会第159回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 工藤和也
２．発表標題 日本語不確定代名詞重複表現の語彙化について
３．学会等名 関西言語学会第44回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関